2019 年 4 月 15 日発行

日本音楽学会

東日本支部通信 第 56 号

MSJ East Japan Chapter Newsletter No.56

第 56 回定例研究会報告

日時：2019 年 3 月 16 日（土）14:00〜17:00
場所：昭和音楽大学南校舎 A214 教室
司会：佐藤 望（慶應義塾大学）

〈研究発表〉

ヘルマン・クレッチュマーによるリーデル合唱団のレパートリーとプログラム構成方法

工藤 真司（東京藝術大学）

〈講演〉

角倉 一朗先生 講演会（例会委員会企画）
「バッハ研究余録」

〈研究発表〉

ヘルマン・クレッチュマーによるリーデル合唱団のレパートリーとプログラム構成方法

工藤 真司（東京藝術大学）

【発表要旨】

1888 年 6 月。ライプツィヒのリーデル合唱団を 1854 年の創設以来率いてきた創設者カール・リーデルが亡くなると、それまでリーデルの実質的なワンマン経営のもと成り立っていたリーデル合唱団は大きな転換点を迎えた。そんな中リーデルの後継として 1897 年まで合唱団の指揮を執ったのが、のちに音楽解釈学の領域で名を馳せたヘルマン・クレッチュマーである。クレッチュマーの尽力もあって、解散の危機に瀕していた同合唱団はリーデルの死後も瓦解することなく 20 世紀中盤まで活動を続けた。しかし、重責を担うこととなった 2 代目指揮者・クレッチュマーがリーデル合唱団と共にどのような演奏会を具体的に構築したかに関しては先行研究での言及が少なく、これまでクレッチュマーは単なる「リーデルの後継者」として手短に扱われてきた。またクレッチュマー自身の経歴を考えると、クレッチュマーがリーデル合唱団に携わった 1888 年から 1897 年という年代は彼が音楽実践から退き音楽学者としての活動へと傾いていった転換点にあたるのだが、それにも関わらず「クレッチュマーの人生においてリーデル合唱団がどのような位置付けであったか」という考察は過去にほとんど行われていない。リーデル合唱団研究の観点からクレッチュマーについて考えても、クレッチュマー研究の観点からリーデル合唱団について考えても、一方がもう一方にとってどのような存在だったかに

関しては検証が不足している。

その相互関係を解明するための一歩として本発表では、アルベルト・ゲーラーによって 1904 年にまとめられたリーデル合唱団のプログラム・リストを参照し、クレッチュマー時代における同合唱団のレパートリーとプログラム構成を考察する。すると、リーデルの時代には見られなかったクレッチュマー独自の工夫がプログラムから浮かび上がる。まずレパートリー分析からは、リーデルのレパートリーとは異なるいくつかの傾向がクレッチュマーの時代に見つかり、「リーデルの基本方針はクレッチュマーへと概ねそのまま継承された」という従来の見解に一定の疑問が投じられる。プログラム構成に目を移すと、リーデルの時代における大きな特徴であった「音楽史を念頭に置いたプログラム構成」はクレッチュマーの時代になると減少していることが判明する。加えて、同時代（1890～1895 年）に同じくライプツィヒで開催されていた器楽演奏会シリーズ “Akademische Orchesterkonzert” に「リーデル的」なプログラム構成やリーデルの思想が引き継がれていた、という可能性もここで提起される。

分析の結果、クレッチュマー時代のリーデル合唱団のプログラム構成にクレッチュマー特有の性質が見られることを提言する。それにより、「リーデル合唱団」という文脈の中でこれまで注視されてこなかったクレッチュマーに改めて光を当て、「単なるリーデルの跡継ぎではなく、新たな試みに挑んだ能動的なリーダーとしてのクレッチュマー」という人間像の提案を試みる。

【傍聴記】（畑野 小百合）

工藤真司氏による研究発表は、ヘルマン・クレッチュマーが指揮者としてライプツィヒのリーデル合唱団を率いた約 9 年間の同合唱団の演奏会を研究対象に、そのレパートリーとプログラム構成を分析するものであった。前任者カール・リーデルが音楽史的（あるいは博物館的）関心に基づくプログラム構成を基本方針としたことを踏まえ、このリーデルの方針の継承者としてクレッチュマーを位置づけてきた先行研究を見直し、「新たな試みに挑んだ能動的なリーダーとしてのクレッチュマー像」を提示するという目的が発表冒頭に示された。

音楽解釈学の祖として取り上げられることの多いクレッチュマーの指揮活動に光を当て、演奏記録のデータを綿密に統計化した意義は大きい。特に、単に上演作品数を時代別に集計するだけでなく、プログラムの性格（全体が大規模作品によって構成されているか、小規模作品の組み合わせかなど）や、ひとつの演奏会内で取り上げられた作曲家相互の関係を分析に取り入れるべく示されたいくつもの手法は、プログラム研究の難しさを知る多くの研究者にとって刺激的なものであったに違いない。

しかし、クレッチュマーをリーデルの延長線上に見る先行研究の認識を覆し、「新たな試みに挑んだ能動的なリーダー」と主張するに十分な根拠が示されたかどうかについては、慎重な意見もあるかもしれない。リーデルのプログラム構成の方針が発表内で明確に示されたのと同じように、クレッチュマーのプログラム観とその革新性についてもよりはっきりとした主張がなされていたら、その構図はさらに鮮明なものとなったと思われるからである。

フロアからは、編成の事情や聴衆の実態など、外的な要因がプログラム構成に影響を与えた可能性を指摘する声があった。器楽演奏会シリーズの “Akademische Orchesterkonzerte”がリーデル合唱団の演奏会に代わって歴史演奏会的なプログラムの受け皿になったのであればそれは何故なのか、ライプツィヒ時代のクレッチュマーによるプログラムや作品の提供の仕方に後年の彼の音楽解釈学の分野での取り組みにつながるものが見出されるのかなど、さらなる報告を期待させる発表であった。

〈講演〉

角倉 一朗先生 講演（例会委員会企画）
題目「バッハ研究余録」

【傍聴記】（佐藤 康太）

本講演は「バッハ研究余録」と題し、角倉一朗先生がバッハ研究の現状をいくつかの観点からまとめつ

つ、ご自身の経験を語るというものであった。全体は大きく以下の 3 つのトピックに分かれる（サブタイトルは当日配布されたレジュメに従う）。

1. 作品の発見など（一部）
2. バッハとドレースデン
3. 図書館の思い出

最初のトピックはシュミーダーによる BWV の出版以降に発見されたバッハの主な作品をまとめて振り返るという内容である。当日配布されたレジュメには全 19 曲について、確認された年、発見者、報告された論文、現在の所蔵図書館およびエディションの情報が記されており、これだけでも非常に資料的価値の高いものとなっている。すべてについて詳しく述べることは時間の都合上不可能であるため、いくつかの事例について経験談も交えつつ詳しく説明がなされた。特に角倉先生自身が発見に関わったコラール *Aus der Tiefen* BWV 246/40a については、発見の経緯が詳しく語られた。また BWV1062 の自筆譜がポーランドから東独に返還された際には、交渉の末自筆譜を見るところまではこぎつけたものの、政治的な事情によりメモを取ることが許されず、ただ楽譜を眺めることしかできなかったという経験も笑顔を交えながら話された。

続く「バッハとドレースデン」のトピックでは、先生が現在作成しているバッハ年表からドレースデンに関わる部分を抜粋し、さらにドレースデンに関連する作品の詳細なリストまで付属するという情報量豊かなレジュメをもとに、歴史的事実と推論、また信憑性の低い伝説を明確により分けながら、角倉先生の現在のバッハに対する考え方が示された。なお先生は 1999 年に日本音楽学会全国大会で「バッハとドレースデン」というタイトルでコロキウムを行っており、その際の原稿は長らく消失と考えられていたものの、本講演の 1 時間前にご自宅から再発見されたという。本講演の中ではこの他にもいくつか、消失および未発表の角倉一朗資料の存在が言及されており、再発見と公表を個人的には期待したいところである。ドレースデンとの関わりの中では、特に《ロ短調ミサ曲》BWV 232 について、時間を割いて語られた。この作品については、角倉先生自身の中でも考え方がかつてと変わっているという。若いころには小林義武氏と同様、ラテン語による普遍的な作品を後世に残すことを意図して書かれたものと思っていたそうだが、現在ではバッハはもっと現実的な人間であり、実際的な目的もなく作品を書くことはなかっただろうと考えているという。《ロ短調ミサ曲》に関しては、ドレースデンでの上演、特に（証拠があるわけではないが）1751 年のカトリック宮廷教会献堂式で上演することを念頭に書かれたものではないかという推測を示された。これは角倉先生に教えを受けた弟子にとっても衝撃的な話だったのか、質疑の中でフロア（角倉先生の教え子が多く集まっていた）との意見交換が多くなされた。その中で先生は、同じく《フーガの技法》BWV 1080 に関しても、バッハがこれからフーガを学ぶ人のための範例集として、具体的な目的をもって作曲したのではないかと考えていると述べられた。これは筆者の見解だが、バッハ・アルヒーフのミヒャエル・マウルがやはり《ロ短調ミサ曲》の具体的な上演目的を探しているように、角倉先生自身の中でのバッハ像の変化は、国際的なバッハ像の変化でもあるのではないだろうか。

最後のトピックは、角倉先生がバッハの自筆譜を閲覧するために訪れた図書館での思い出を語るというものである。今では考えられないことだが、まだ東独時代のベルリンでは《フーガの技法》の自筆譜を簡単に見せてくれたという。一方ロンドンの大英図書館は非常にガードが固く、作曲家・音楽学者のファーガソン氏の紹介で『平均律クラヴィーア曲集』第 2 巻の自筆譜を見ることができたそうだ。デジタル化の進む 21 世紀において、現地まで行かなくても高精細のスキャン画像が見られることも多いが（バッハに関しては Bach-digital がバッハ資料のデジタル化を進めている）、実際にヨーロッパに渡航し、足を使って調査することも大切だと思わされるお話だった。

講演全体を通じて、バッハ研究の最新の課題などさまざまな貴重な情報もあったが、それだけでなく角倉先生の研究者としてのあり方が節々から感じられ、研究者にとっての理想的なロールモデルの 1 つが提示

されていたように筆者は思う。会場にはまだ 20 代の学生から、すでに大学教員としては現役を引退した会員まで幅広い層が集まっていたが、そのすべての人が、自身のライフプランに照らして得るものがあるような講演であった。そんな講演の最後には、角倉先生の近況が語られた。御年 87 歳にして健康のために散歩をし、1 日 6〜8 時間書斎で勉強をしているという。近年の数々の翻訳書もその成果なのだろう。現在は翻訳ではなく 2 冊の著作を準備中で、すでに出版社も決まっているとのことである。

日本音楽学会東日本支部通信　第 56 号

2019 年 4 月 15 日発行
発行：日本音楽学会東日本支部
http://www.musicology-japan.org/east/

日本音楽学会東日本支部事務局
〒102-0072
東京都千代田区飯田橋 3 丁目 3 番地 3 号生光ビル 303
TEL&FAX：03-3288-5616
E-Mail：higashi@musicology-japan.org